

氏家昂大インタビュー

2月3日個展初日に氏家昂大さんのインタビューを行いました。

多くのお客様が興味をもたれている漆貫入彩の技法や技法が生まれたエピソードなどを教えて頂きました。エネルギーで行動力のある氏家昂大さんだからこそ生まれた作品群なのだと、改めて思いながらお話を伺いました。

■陶芸を始めたきっかけを教えて下さい。

父が一級建築士ということもありまして、幼い頃からものづくりや職人っていいなと思っていました。

高校で進路を決める時、ものづくりがしたいという楽しい気持ちで美術大学へ進学しました。

1年生で金属、漆、染色、陶芸を一通り経験し、2年生で専攻を選ぶ段階で陶芸を選びました。

二十歳の時に東日本大震災で被災し、「いつ死んでもいいという準備をしておかないといけない。潔く死ねるくらい頑張って生きよう」という意識に変わり、大学3年生からは制作に没頭しました。

■仙台から岐阜へ制作の場を移された特別な理由はあるのでしょうか。

元々学生の頃から岐阜に興味があったというのもありますが、以前10日間車中泊で京都から信楽、多治見まで街を見て周りました。その中で、多治見は若い人が生き生きとしていてすごく良い印象を受けました。

■技法について教えて下さい。

●土はどこの土を使われているのですか。

美濃と九谷の土をブレンドして使っています。その他にシリーズによって唐津や美濃のもぐさ土を使用しています。

●温度は何度くらいですか。

技法、釉薬の種類によって違います。1150°C～1300°Cまでです。

特に青白磁は温度に神経を使い、窯の温度が数度違うだけで貫入の入り方が変わってきます。

●土ではなく磁土を選ぶ理由を教えて下さい。

荒々しさを表現する中で、土で作ったら荒々しくできるのは当然の事ですが、逆に磁土で荒々しくした方が面白いのではないかと思い使用し始めました。

つるつとした清潔感と、ごつごつした荒々しさが混在し、繊細さや刹那的な危なっかしい印象が出ていればと思っています。

■漆貫入彩について漆は工程のどのタイミングで入れるのでしょうか。

本焼きから出した最後に塗ります。

■漆貫入彩が生まれたエピソードがもしあれば教えて下さい。

卒業制作の制作中、大壺を窯から出したら貫入にひびが入っていました。漆で継ごうと漆を塗り、貫入に漆を染み込ませていけばひびが目立たなくなるのではないかと思い立ちました。赤色の漆を貫入に入れたところ、毛細血管が張り巡らされたような、どこか温かみのある大壺になったと感じました。

漆貫入彩誕生から 10 年になります。

■今後の作品イメージや展望はありますか。

基本的にいつも求められる状況に応じて出していくというスタイルで制作しておりますが、その中で今考えていることはサイズです。

アメリカのアート市場を見て、サイズの拡大の必要を感じました。

それと、コンテクストを意識した作品作りも展開していきたいと考えています。

■氏家先生の作品を真似して作りたいと思う人が仮に現れたとしたら、真似はできるものなのでしょうか。

できないと思います。漆貫入彩だけではなく、釉薬の造形性もありますし、色彩のセンスというより現象にどう対応できるかの積み重ねです。10 年間で得たデータも作品づくりに欠かせないものとなっています。